

新宿の街のモダンアート Shinjuku: the City of Modern Art

開館50周年記念

PRESS RELEASE

2026

1.10 >>> 2.15 sat. sun.

中村彝、佐伯祐三から、松本竣介、宮脇愛子まで。新宿ゆかりの芸術家たちの半世紀にわたる軌跡。



SOMPO MUSEUM OF ART



SOMPO美術館

<https://www.sompo-museum.org>

開館50周年記念

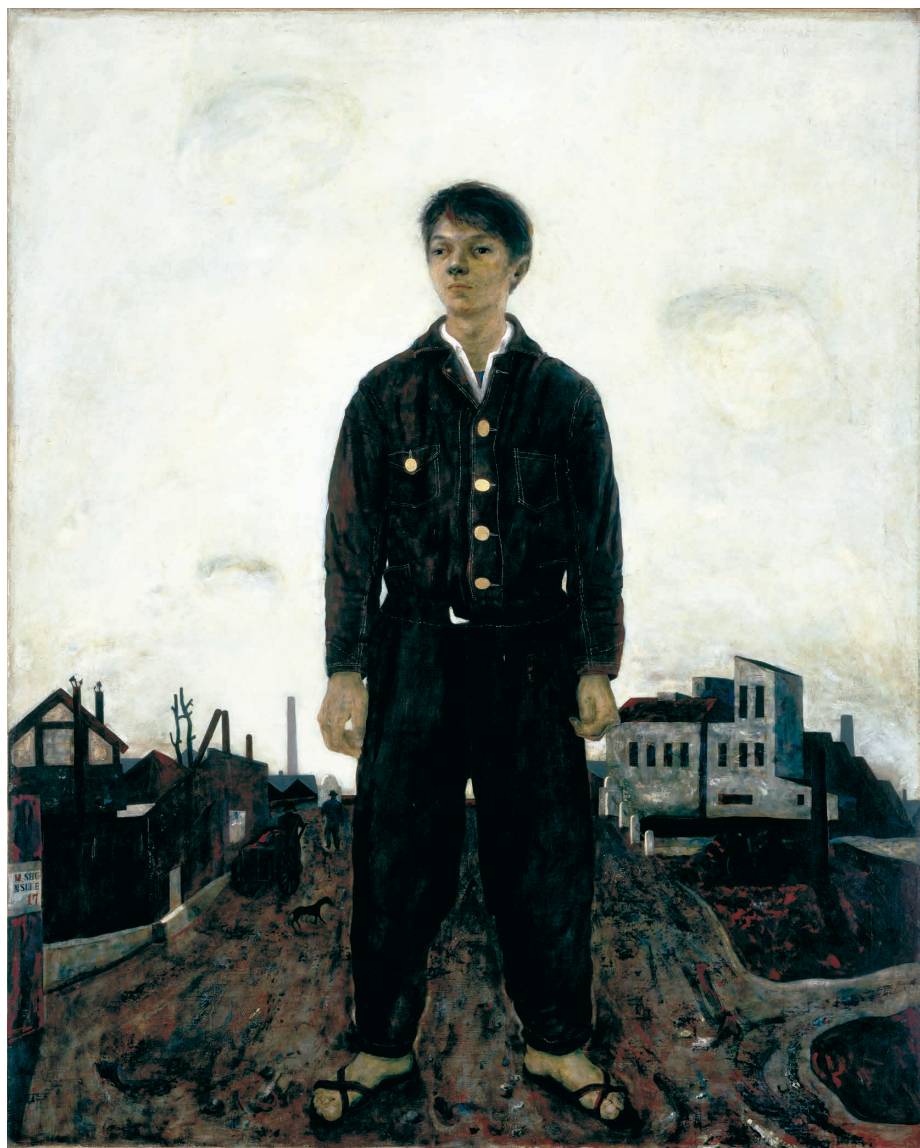
モダンアートの街に

1976年7月、SOMPO美術館は新宿に開館しました。このたび、SOMPO美術館の開館50周年を記念し、新宿をテーマとした展覧会を開催いたします。

日本の近代美術(モダンアート)の歴史は、新宿という地の存在なくしては語れません。明治時代末期の新宿には新進的な芸術家が集まりました。そして、新宿に生きる芸術家がさらに芸術家を呼び込み、近代美術の大きな拠点の一つとなりました。

本展は、中村^{つむ}彝、佐伯祐三から松本^{しんぺい}竣介、宮脇^{みやわき}愛子まで、新宿ゆかりの芸術家たちの約半世紀にわたる軌跡をたどる、新宿の美術館として初めての試みです。

開館50周年にあたる2026年度、SOMPO美術館では「再発見」をキーワードにさまざまな展覧会を開催します。本展は、そのプレ企画に位置付けられます。新宿に生きた約40名の作家が、50年という時間軸で一堂に会するという、またとない企画です。



広報用画像 1

松本竣介 《立てる像》

1942年
油彩／カンヴァス
162.0×130.0cm
神奈川県立近代美術館
©上野則宏

描かれた舞台は新宿である。地面を踏みしめて仁王立ちする画家の姿は堂々としているが、目はうつろな様子にみえ、どこか不安を感じさせる。一方で、画家としての誇りをも明快に表しているといえよう。背景に広がるのは、人の気配が少ないごみ捨て場である。自画像としても、風景表現としても、竣介の本領がいかに発揮された代表作である。

の街にモダンアート

新宿文化の街

展覧会の見どころ

1 アートで知る、新宿の文化史

明治から戦後初期にかけて4つの区分を設定。時系列に沿いつつ、それぞれを全く異なる運動として捉え、新宿文化の多様性と持続性への理解を深めることができます。

2 見て、歩いて、味わう新宿

当館の位置する新宿では、数々の「ゆかりの地」を今もなお気軽にめぐることができます。美術館で新宿文化に触れたあと、館を飛び出して、「ゆかりの地」の息吹に浸る、いわば“逆”没入型の体験ができます。

3 あのアーティストも「新宿」？

「新宿」という地域性に注目すると、著名なアーティストたちの意外な関係が見えてきます。新宿に生きたアーティストが新宿に再集結する、またとない機会です。

展示構成

i 章 中村彝と中村屋 ルーツとしての新宿

コラム 1 文学と美術

ii 章 佐伯祐三とパリ／新宿 往還する芸術家

コラム 2 描かれた新宿

iii 章 松本竣介と綜合工房 手作りのネットワーク

iv 章 阿部展也と瀧口修造 美術のジャンルを越えて

エピローグ 新宿と美術の旅はつづく

新宿文化の街

1章 中村彝と中村屋

ルーツとしての新宿

1909 (明治42) 年、相馬愛蔵・黒光夫妻は新宿に中村屋の本店を構えます。中村屋には、荻原守衛 (嶺山) や中村彝をはじめとする多くの新進芸術家たちが集まり、「中村屋サロン」を形作りました。

中村屋サロンは、日本の近代美術史におけるルーツの一つといえます。荻原守衛は彫刻家オーギュスト・ロダンに強い衝撃を受け、彫刻家に転向。パリでロダンの対面を果たし、その影響を日本にもち帰りました。守衛は帰国から2年後、30歳の若さで没しますが、短い活動期間の中で彫刻史に大きな足跡を残しました。

中村彝は、中村屋に集う作家たちの中心的な存在となりました。終のすみかを構えた新宿・下落合にも、彝を慕う作家たちが集い、彝は彼らに示唆を与え続けました。

本章では、日本の近代美術、そして新宿の美術の芽を育てた存在として、中村彝に焦点を当てます。中村屋サロンに出入りした作家や、彝に師事した作家の作品をあわせて展示することで、

モダンアートの一拠点としての新宿を捉え直します。

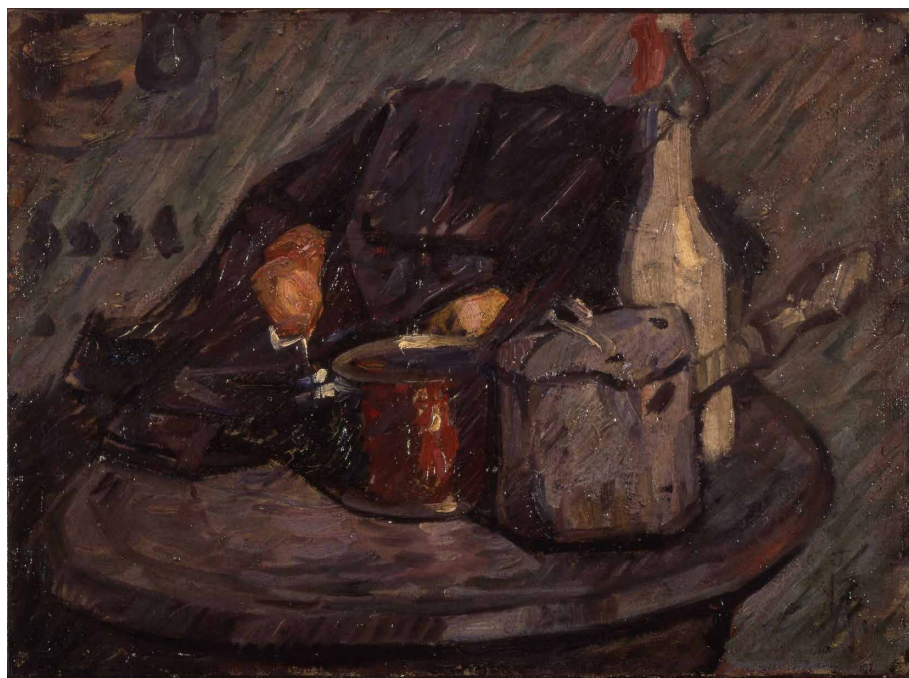


広報用画像2

中村彝 《頭蓋骨を持てる 自画像》

1923年
油彩／カンヴァス
101.0×71.0cm
公益財団法人大原芸術財団
大原美術館

彝が描いた自画像の中でも、鋭い眼差しを真正面から観者へ向ける姿が印象的である。アーチ型に区切った画面の内側にカーテンを掛け、静物画でたびたび取り上げたモチーフを描き込むことにより、重層的で奥行きのある空間が実現している。頭蓋骨を手に持つ姿は、聖人像を意識しているのだろう。筆致は大胆かつ力強く、色彩の効果も巧みである。彝の終生にわたる探究が結実した作品といえる。



広報用画像3

中村彝 《牛乳瓶のある静物》

1912年頃
油彩／カンヴァス
33.7×45.7cm
株式会社中村屋
©上野則宏

円卓の上に所せましと並べられたガラス瓶や金属製のコップ、その合間から、黄色い果物のようなものが見える。モチーフの置き方や構図の取り方から、ポール・セザンヌを参照したことが明らかであると同時に、同じモチーフも配置を変えながら繰り返し描き続けた実験的な姿勢の萌芽がみられる。

コラム1 文学と美術

1910(明治43)年、雑誌『白樺』が創刊されました。西洋美術を見る機会が非常に限られた当時の日本に、カラー図版で作品を紹介したことで、セザンヌやファン・ゴッホといった西洋の芸術家たちに対する注目を促しました。同年にパリから帰国した有島生馬は、ロダンへ手紙とともに『白樺』と浮世絵を贈り、翌年にロダンから白樺派のもとへ彫刻3点が贈られます。

『白樺』の中心的存在の作家、武者小路実篤^{むしゃこうじ さねあつ}*。実篤ともっとも親しかった芸術家に、岸田劉生^{りゅうせい}がいます。劉生は大正時代の美術を牽引した存在であり、実篤作品の装幀を多数手がけるなど、活発な交流を行いました。

新宿ゆかりの作家を描いた肖像画、また文学者と画家との交流をうかがわせる作品を取り上げます。

*武者小路は「むしゃのこうじ」と読むのが一般的ですが、本人は「むしゃこうじ」と称し、署名にMushakojiと表記することもありました。



広報用画像4

岸田劉生 《武者小路実篤像》

1914年
油彩／カンヴァス
38.0×36.5cm
東京都現代美術館

岸田劉生は、新宿ゆかりの作家・武者小路実篤とさかんに交流し、実篤の小説の装幀を数多く手がけた。本作には、セザンヌやファン・ゴッホらポスト印象派の影響が顕著だが、そこへ劉生ならではの執拗な眼差しと細密な筆致が組み合わさっている。全体は温かな印象に仕上がっており、盟友である実篤との友情を色濃くとどめている。

ii 章 佐伯祐三とパリ／新宿 往還する芸術家

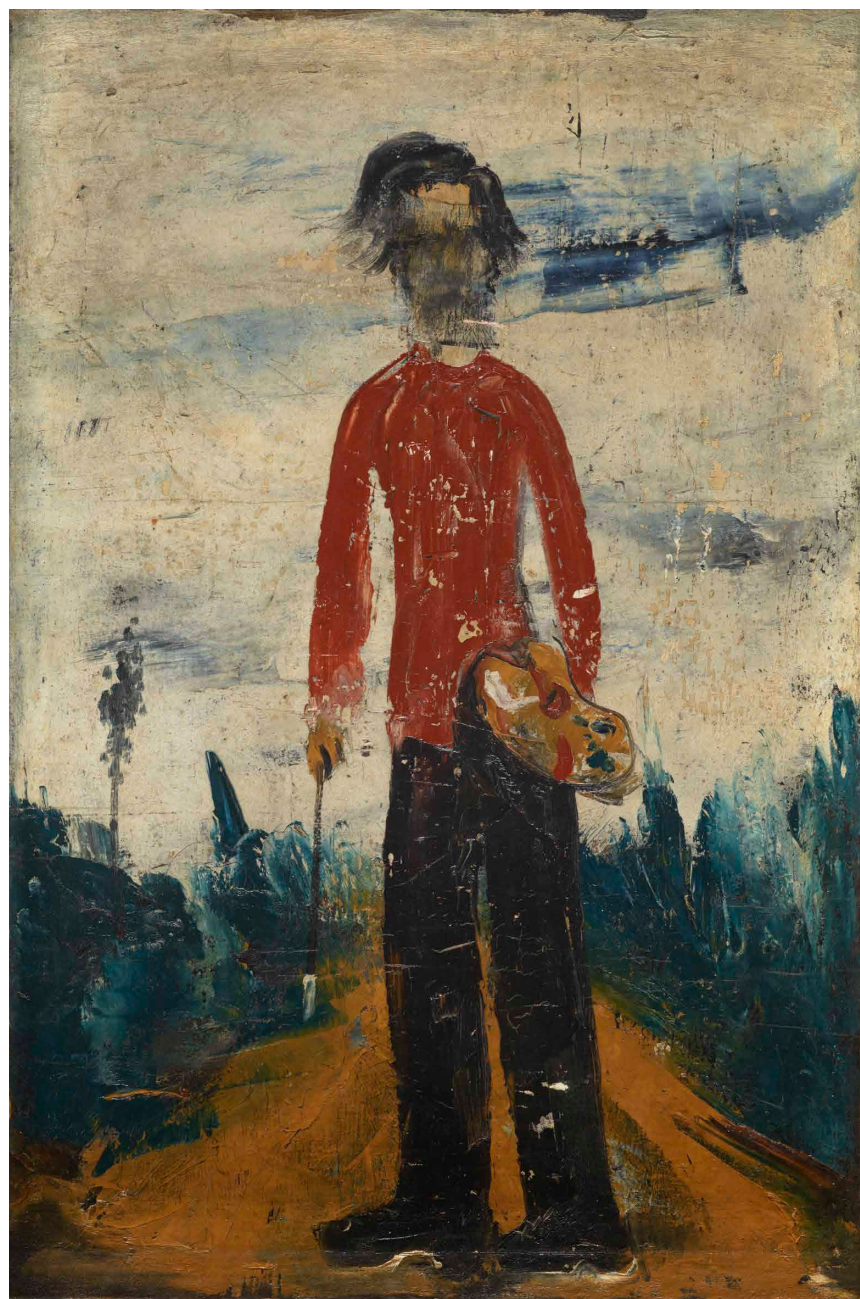
1921(大正10)年、白樺美術館第1回展覧会にファン・ゴッホの《ひまわり》(いわゆる「芦屋のひまわり」)が展示されました。この展覧会の後、佐伯祐三は武者小路実篤宅で本作と対面します。ファン・ゴッホとの邂逅は、佐伯にとって重要なできごとであったといえるでしょう。

同年、佐伯祐三は新宿の下落合にアトリエ付きの住居を新築。近所に暮らしていた曾宮一念と知り合ったのはこのころで、曾宮を通じて中村彝を知ったといえます。

1924(大正13)年、佐伯祐三は妻・米子、長女・彌智子とともにパリへ渡り、里見勝蔵を訪問。里見からモーリス・ド・ヴラマンクを紹介してもらい、その場で作品を見せると、アカデミックだと

厳しく非難されます。これが一つの転機となり、写実を離れ、都市風景を速記的に描く画風を確立。後進の作家たちにも刺激を与えました。

パリと日本を行き来しながら制作を展開した代表的な作家としての佐伯祐三を中心に上げます。



広報用画像5

佐伯祐三 《立てる自画像》

1924年
油彩／カンヴァス
80.5×54.8cm
大阪中之島美術館

佐伯による自画像の代表作。写実的な描写から脱し、ひと筆で描いたかのような平面的なシルエットは、パリの街路を描いた一連の表現に通じる。正面を向いて立つ姿勢は画家としての自負をうかがわせる一方で、顔の表情だけはパレットナイフで削り取られている。

コラム 2 描かれた新宿

モダンアートの街・新宿の歴史は、首都東京が急速な変貌をとげた歴史と並行します。創作版画運動の担い手たちによる『画集新宿』と『新東京百景』は、いずれも昭和初期に刊行された版画集です。

織田一磨は、山本鼎^{かなえ}に呼びかけて、1918(大正7)年に日本創作版画協会を結成。創作版画の普及につとめました。1923(大正12)年に発生した関東大震災から復興していく東京の姿を、『画集新宿』(1930[昭和5]年)などの版画集に記録しました。

『新東京百景』(1929[昭和4]年～1932[昭和7]年)は、日本創作版画協会の同人である川上澄生ら8名の作家により刊行されました。本展では、全100図のうち5図を紹介します。

これら2編の版画集を中心に、同時代に描かれた新宿や、新宿を生きた作家たちの作品を特集します。

広報用画像 6

木村莊八
《新宿駅》

1935年
油彩／カンヴァス
97.5×130.5cm
個人蔵

本作は、《新宿駅(東京風景第五)》として発表された。この駅舎は1925年に竣工し、1962年に取り壊されるまで新宿のターミナルとして運営された。関東大震災からの復興によって大きく装いを変えていった新宿において、駅は象徴的機能を果たしていたといえよう。駅舎内を往来する人々の群像を活写した代表作である。



iii

章 松本竣介と綜合工房
手作りのネットワーク

新宿の落合やその近辺（目白、中井など）には、中村彝や佐伯祐三をはじめ、画家や文学者などの文化人が暮らし、目白文化村や落合文士村として世代をこえて受け継がれました。これとあわせ重要なのは、新宿に隣接する池袋です。1930年代、一帯には多くの芸術家が集まり、各地にアトリエ村を形成。これらは池袋モンパルナスと総称されました。1929（昭和4）年に移り住んだ松本^{しゅんすけ}竣介、彼と長年活動をともにした^{かいふく}鬨光、麻生三郎、鶴岡政男、寺田政明たちは、池袋モンパルナスを代表する作家です。

竣介は、下落合にアトリエ付きの自宅を構えます。このアトリエを「^{くわさう}綜合工房」と名付け、雑誌『雑記帳』を通じ、多様な文化人との活動の場をもちました。1943（昭和18）年には新人画会を結成。戦中の時局から距離を置くように、^{せいひつ}静謐な風景画を描き続けました。

松本竣介を中心に、綜合工房や九室会、新人画会に集った作家を取り上げます。

広報用画像7

松本竣介
《N 駅近く》1940年
油彩／カンヴァス
97.0×131.0cm
東京国立近代美術館

さまざまな角度から捉えた建物や通り、そこを行き交う人々などを、遠近感もまちまちに組み合わせ、平面上に落とし込む。それぞれのフォルムや色彩が複雑に交錯することで出現する空間は、都会の騒がしさや猥雑さを感じさせない。むしろ、柔らかな色調も相まって、軽快なリズムと詩情で満たされている。N 駅とは、西武新宿線の中井駅のこと。





東郷青児
《黒い手袋》

本作は東京火災（現在の損保ジャパン）のパンフレット表紙に使用された。なめらかな肌の表現と、シンプルに様式化されたフォルムをもつ「青児美人」（東郷様式）を確立する前の作例だが、細部をそぎ落とした曲線的な造形がすでに表れている。当館は東郷の協力により、新宿の地に東郷青児美術館として開館した。

vi章 阿部展也と瀧口修造
美術のジャンルを越えて

1948(昭和23)年、阿部^{あべ}芳文^{よみ}は第1回モダンアート展への出品を機に阿部^{あべ}展也^{のぶ}を名乗りました。
下落合に移り住んだのは、この年のことです。

1953(昭和28)年に西落合へ移った評論家・美術家の瀧口修造をはじめ、阿部のもとには多くの作家たちが集まりました。美術家の福島秀子、写真家の大辻清司らは、瀧口の命名により実験工房を結成。絵画や写真、彫刻、音楽、映像、舞台、詩などジャンルを横断する活動を展開します。実験工房のメンバー以外にも、芥川(間所)紗織、宮脇愛子などが阿部に師事しています。

阿部と瀧口の共作になる詩画集『妖精の距離』（1937〔昭和12〕年）は、日本における初期のシュルレアリスムの表現として記念碑的に位置付けられる作品です。本作を起点に、阿部や瀧口とともに新しい手法を絵画に取り入れていった作家を紹介します。

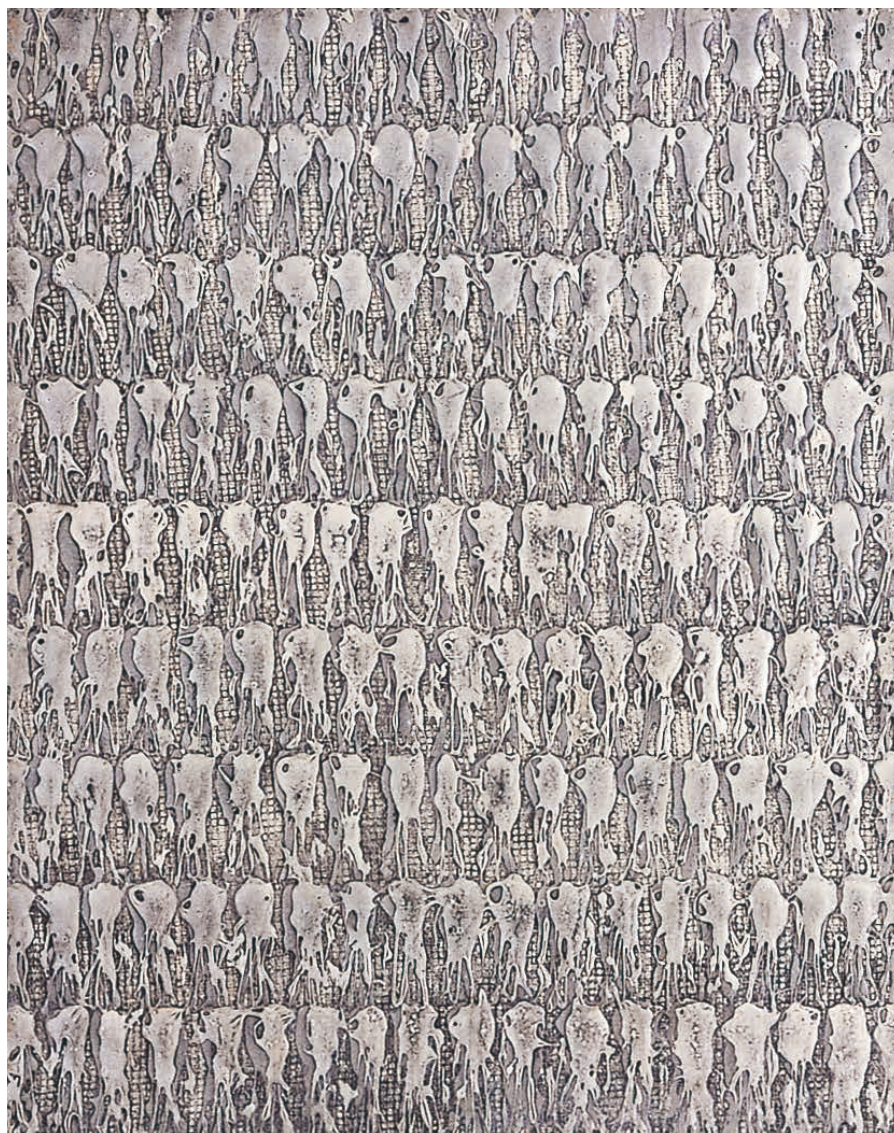


広報用画像9

芥川(間所)紗織
《女》

1954年
染色／綿布
131.0×98.4cm
板橋区立美術館

芥川(聞所)の代表作《女》のシリーズの中でも、大作に位置付けられる作品。ろうけつ染めで大胆に表された女性は、髪を大きく逆立て、空を掴むような身振りをしている。荒々しさや力強さがみなぎっているが、画面が均衡を保っているのは、染めの技法の鍛錬と構図の周到さによるものと考えられる。



広報用画像 10

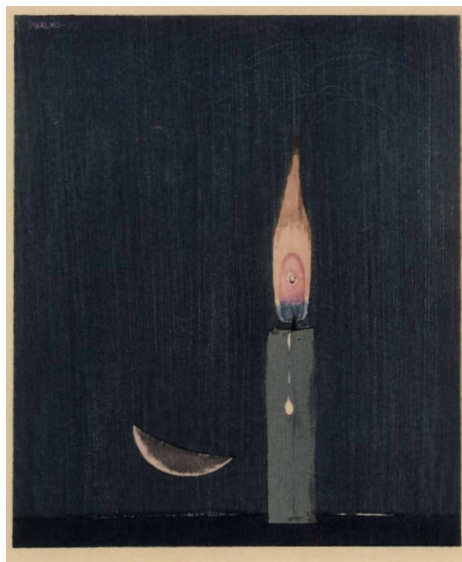
宮脇愛子 《作品(TL11-0)》

1962年
油彩・大理石粉／カンヴァス
91.0×71.0cm
水戸芸術館

宮脇は、阿部展也のアトリエに通い、指導を受けた一人である。1960年代には大理石粉を混ぜた絵の具を用いて抽象的な作品を制作。絵の具を盛り上げ、規則的に配置する行為を繰り返すことで、シンプルかつ重層的な奥行きある画面となっている。素材感が生々しい印象と同時に、静謐な情感をたたえているのは、こうした丹念な作業が背景にあるためだろう。建築家の夫・磯崎新の旧蔵作品。

エピローグ 新宿と美術の旅はつづく

本展の物語は、中村屋に始まりました。水戸に生まれた中村彝は、後半生を新宿に生きました。一方、エピローグで取り上げる^{せいみやなおみ}清宮質文は新宿に生まれ、現在は水戸に眠っています。清宮が手がけた作品は、はかなさと追憶が込められ、内省を促します。中村彝から始まった50年にわたる本展のストーリーを、清宮の静謐な版画によって閉じます。



広報用画像 11

清宮質文 《深夜の蠟燭》

1974年
木版／紙
17.8×15.0cm
茨城県近代美術館 照沼コレクション

清宮の代表作の一つ。蠟燭は、世の虚しさを表す「ヴァニタス」(vanitas)の象徴的モチーフとされている。一緒に描き込まれている月は、地平線から昇ってきたところだろうか。細く欠けたさまは、はかなさそのものである。

主要作家紹介

中村彝 1887(明治20)～1924(大正13)

茨城にて、旧水戸藩士の家系に生まれる。11歳で牛込区(現・新宿区)へ転居。1907(明治40)年、太平洋画会で中村不折、満谷国四郎に師事。翌年より中村屋に出入りし、荻原守衛のもとをたびたび訪れた。1911(明治44)年には、中村屋の裏に住むようになる。1914(大正3)年冬に療養で伊豆大島を訪れるも、持病の悪化により翌春帰京。1916(大正5)年、新宿・下落合にアトリエ付きの住居を新築し、終生を送る。

佐伯祐三 1898(明治31)～1928(昭和3)

大阪の生まれ。川端画学校で藤島武二の指導を受ける。1918(大正7)年、東京美術学校に入学。1921(大正10)年、下落合にアトリエ付き住居を新築。渡欧前の里見勝蔵のアトリエ(池袋)で芸術家仲間と交友。1924(大正13)年に渡仏し、里見の同行でグラマンクを訪問。1926(大正15)年に帰国。翌年、石井柏亭の推薦により新宿の紀伊國屋で個展。同年再渡仏。パリ郊外のヌイイ=シュル=マルヌで没。

松本竣介 1912(明治45)～1948(昭和23)

東京の生まれ。出生名は佐藤俊介。幼少時に岩手・花巻へ移る。1925(大正14)年、病気のため聴覚を失う。1929(昭和4)年に上京し、池袋に住む。同年、太平洋画会研究所に通い始める。1936(昭和11)年、松本禎子と結婚。下落合(現在の中井)に新居を構え、アトリエを「綜合工房」と名付ける。同年、雑誌『雑記帳』を創刊。1940(昭和15)年、九室会会員。1943(昭和18)年、新人画会の結成に参加。1947(昭和22)年、自由美術家協会に入会。新宿で没。

阿部展也 1913(大正2)～1971(昭和46)

新潟の生まれ。1936(昭和11)年、アヴァン・ガルド芸術家クラブに参加。翌年、瀧口修造との共作で詩画集『妖精の距離』を発表。1938(昭和13)年から1940(昭和15)年にかけて、雑誌『フォトタイムス』に参加。1941(昭和16)年にフィリピンへ従軍。1946(昭和21)年に復員。1948(昭和23)年、下落合に構えたアトリエには、福島秀子や宮脇愛子、瀧口修造が出入りした。1957(昭和32)年に渡欧し、各地を歴訪。1962(昭和37)年にローマへ定住。同地で没。

会期中のイベント 各イベントの詳細は美術館ホームページで随時公開します

学芸員のギャラリートーク 自由参加

1月16日(金)、1月23日(金) いずれも 18:00-18:40

本展担当学芸員が展覧会の見どころや出品作品について展示室で解説を行います〈展示フロアを移動しながらマイクを使用して説明します〉

参加方法=時間になりましたら5階展示室入口へお集まりください

参加費=無料 ※ただし、本展への入場が必要です

ギャラリー★で★トーク・アート 要申込

2月9日(月) 14:00-16:00

休館日に貸し切りの美術館で、ボランティアガイドと話しをしてみませんか? 作品解説を聞くのではなく、参加者が作品を見て、感じて、思うことを話しながら楽しむ参加型の作品鑑賞会です〈定員30名〉

参加方法=web 申込/2025年12月19日(金) 10:00より

美術館ホームページにて受付開始

参加費=1,500円(税込)、高校生以下無料 ※ご招待券、ご招待状、年間パスポート、割引等は適用できません

収蔵品コーナー

東郷青児《超現実派の散歩》 フィンセント・ファン・ゴッホ《ひまわり》

開館50周年記念

モダンアートの街・新宿

The 50th Year of the Sompo Museum of Art

Shinjuku: The City of Modern Art

会期=2026年1月10日(土)→2月15日(日)

会場=SOMPO美術館 〒160-8338 東京都新宿区西新宿1-26-1

開館時間=10:00-18:00(金曜日は20:00まで) ※最終入場は閉館30分前まで

休館日=月曜日(ただし1/12は開館)、1/13

主催=SOMPO美術館、東京新聞 特別協賛=SOMPOホールディングス 特別協力=損保ジャパン

後援=新宿区、TOKYO MX

観覧料(税込) 年齢は入場時点	事前購入券	当日券
一般(26歳以上)	1,400円	1,500円
25歳以下	1,000円	1,100円
高校生以下		無料

身体障がい者手帳・療育手帳・精神障がい者保健福祉手帳(マイリオIDも可)を提示のご本人とその介助者1名は無料、被爆者健康手帳を提示の方はご本人のみ無料

- ・25歳以下の方は生年月日が確認できるものをご提示ください
- ・事前購入券は2025年11月11日(火) 10:00から販売開始、公式電子チケット「アソビュー!」、イープラス、ローソンチケット(Lコード:31798)、チケットぴあ(Pコード:687-324)などでお買い求めいただけます
- ・事前購入券は手数料がかかる場合があります

プレスお問合せ

「モダンアートの街・新宿」展 広報事務局(ウインダム内)

e-mail sompo-m-pr@windam.co.jp

TEL. 03-6661-9447 FAX. 03-3664-3833

〒103-0014 東京都中央区日本橋蛸殻町2-14-11 鴨下ビル2階

SOMPO美術館

アクセス 新宿駅西口より徒歩5分

050-5541-8600(ハローダイヤル)

<https://www.sompo-museum.org/>

今後の状況により、本展の会期や内容の変更、または臨時休館する可能性があります。最新情報は美術館ホームページ等でご確認をお願いします

